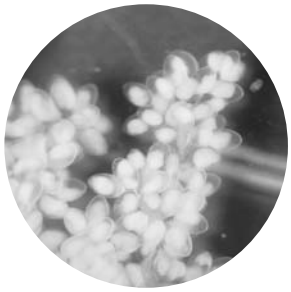
いしかり博物誌 72

アオイガイぷかり、ぷかり

10月にオホーツク海沿岸で殻を背負った珍しいタコが見つかりました。このタコは名を「アオイガイ」といいます。その殻は巻貝のような形で、縁が一部黒いほかは純白です。

実は、石狩湾沿岸でも例年9月から10月にかけて、このアオイガイの殻が漂着します。数は大変少なく、拾えるかどうかは運次第。殻を持つのはメスだけで、産卵のため石灰質の分泌液で作られたものです。残念ながらタコが入ったままの殻はほとんどありません。きっとカモメやカラスがタコを先に食べてしまうのでしょう。先日、やっとタコが入っていた痕跡を見つけました。それは殻の中に卵だけが残っていました。

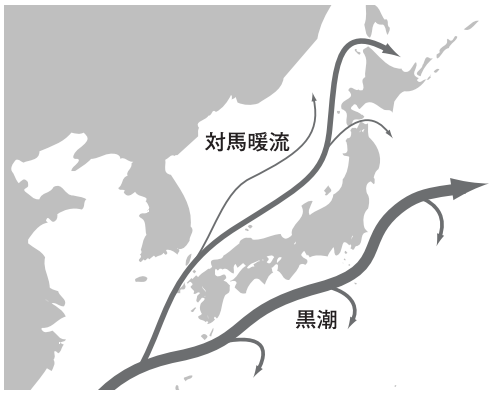
▲卵が付着したアオイガイの殻



▲卵の顕微鏡写真
（一粒の大きさ約1mm）

ところでアオイガイは、どこから来るのでしょうか？　実はこのタコは、北海道近海にいるのではなく、本来、沖縄など南の暖かい海域に住んでいます。

では、どうして石狩湾やオホーツク海まで来るのでしょう？その理由は、日本海を北上する対馬暖流にあります。この海流は黒潮の分流ですが、アオイガイは殻を作ってプカプカ浮いているうちに、これに流されて北海道まで来るのです。しかし、不思議なことに、同じ暖流が流れる太平洋岸ではほとんど発見されません。なぜ太平洋側に流れていかないのかなど、アオイガイに関する謎はまだたくさんあります。

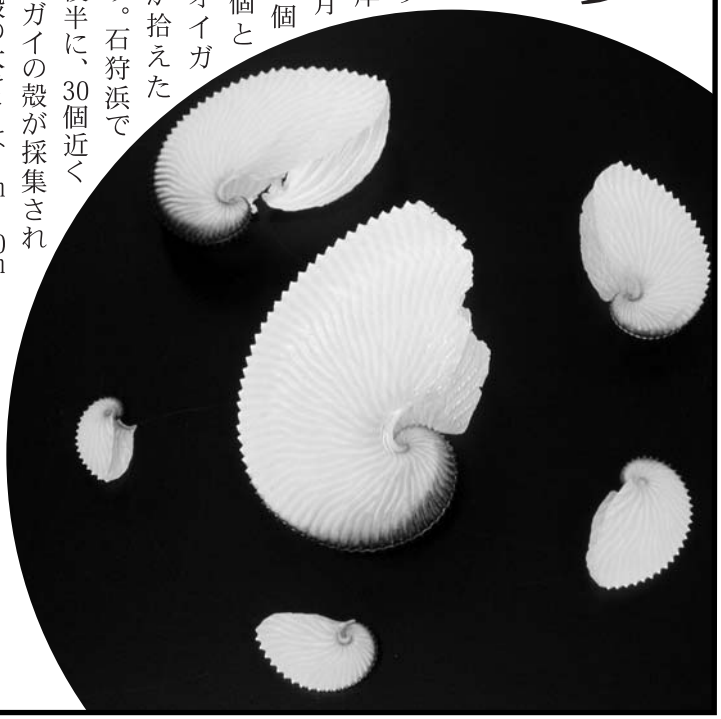


日本付近の暖流（地図作成／志賀健司）

今年、オホーツク海沿岸では10月前半に10個から30個というアオイガイの殻が拾えたそうです。石狩浜でも10月後半に、30個近くのアオイガイの殻が採集されました。殻の大きさは3㎝～20㎝で、多いときには一カ所で一度に9個も採集できました。

アオイガイは、英語で「ペーパー・ノーチラス」と呼ばれます。これは殻が紙のように薄く、オウムガイに似ているからです。殻の重さは3㎝程度で1g以下、20㎝前後の大きさでも20gです。「ノーチラス」はギリシャ語の「船乗り」が語源だといわれていますので、旅するアオイガイにはピッタリでしょう。また、漢字では「葵貝」と書きますが、これは殻の形が「葵」の葉に似ているからです。

（石橋孝夫）



▶アオイガイ（カイダコ科）の殻
（大きさ最小3cm、最大20cm）

■文化財課・いしかり砂丘の風資料館 ☎62-3711
✉i-museum@bz01.plala.or.jp
■石狩浜海浜植物保護センター ☎60-6107
✉ihama@city.ishikari.hokkaido.jp